

# 幼児の母親は男性保育者にどのようなイメージを抱いているか ～育児の相談相手としての可能性を探る～

小林 真・竹田 誠\*

## What image do the young children's mothers hold in the male childcare person? :

The possibility as a consultant about child-rearing.

Makoto KOBAYASHI and Makoto TAKEDA

キーワード：男性保育者，育児支援，保育者養成

Keywords : male childcare person, support for child-rearing, childcare person training

### 問題と目的

大村(2006)が保育所に子どもを預けている母親129名を対象に、どのような子育て支援期間を利用しているかを尋ねたところ、91名が保育所を選択していた。しかし笠原(1999a)は、幼稚園・保育所に子どもが在籍する保護者208名を対象に、育児相談の相手を尋ねたところ、保育者をあげたのはわずか10名であった。相談相手として最も多かったのは配偶者で、次いで友人であった。また笠原(1999b)は、保育者に対してどのような相談をするか、理想の相談相手はどのような人物か、という調査を行った。その結果、保育所に子どもを預けている保護者よりも、地域で育児サークルに来所する保護者の方が保育者に相談したいと回答していた。これらの結果を見ると、保護者は子供を預かって育ててくれる場として幼稚園・保育所をとらえてはいるが、保育者を相談相手としてとらえていないようである。

しかし、幼稚園・保育所が地域の子育て支援センターの役割を担っている今日、保育者が育児相談の相手として保護者の支援を行うことも増えてくると思われる。したがって、笠原(1999b)で報告されているように、保育者が今後、「きちんと話を聞いてくれる人」「きさくで子どもに優しく接してくれるような相談しやすい人柄」であることが望まれる。

ところで、近年は保育現場にも男性の保育者(幼稚園教諭および保育士)が見られるようになった。菊池(2002)は、男性保育者に対するイメージを、女性保育者・保護者・学生を対象に調査した。保護者に関していえば、男性保育者が勤務する園の保護者は男性保育者に対する不安が低く、男性保育者がいない園の保護者は不安が高いことが示された。しかしまた、どちらの保護者も、男性保育者に期待する側面もあったという。

\* 富山YMCA萩浦保育園

これまで女性の仕事と思われていた保育職に男性が進出した場合に、保護者(特に母親)は男性保育者を育児相談の相手として見なすのであろうか。もし育児相談をするのであれば、また、どのような人物に、どのような相談をしたいと感じるのであろうか。保護者が抱くイメージを正しく把握することが、男性保育者の力量形成や保育者養成に不可欠である。

そこで本研究では、保護者が男性保育者を育児相談の相手と見なすか、どのような人物ならどのような相談をしたいと考えているのかなどを調査する。そして、育児相談ができる男性保育者を養成するために、何が必要なのかを検討したい。<sup>1)</sup>

### 方 法

**予備調査** 男性保育者に対するイメージや、男性保育者に育児相談をしたいと思うかなどの意見を収集するため、予備調査を実施した。富山市内の児童文化センターが主催する育児サークルに参加している母親3名を対象に、第二著者が聞き取りを行った。その内容は、男性保育者にどのような印象を持っているか、育児相談をしたいと思うかについてである。

その結果、男性保育者に期待することは3名とも体を使ったダイナミックな遊びだと回答した。また育児相談をしたいと思うかについては、2名の母親が相談したいと回答した。その理由は、女性保育者と同じように保育

1) 男性保育者に関する調査を行った菊池(2002)は、男性保育者が複数勤務している保育所を対象に調査を行っている。その理由は、男性保育者が1名だけの場合には、その保育者の人物像が一般的な男性保育者像となってしまう可能性が高いため、複数の男性保育者を相対的に比較できる園を対象をしばったためである。しかし富山県内では、複数の男性保育者が勤務する保育所・幼稚園は非常に少なかった。そこで本研究では、男性保育者が在籍しない幼稚園の母親を対象に調査を行うこととした。

について学んでいるから、父親も育児をする時代だから、女性保育者よりもさっぱりとしていて後腐れがなさそう、というものであった。したがって、菊池(2002)や笠原(1999a)の尺度を用いて本調査をしても特に問題はないと判断した。

**対象者** 富山県内の2つの私立幼稚園に子どもを通わせている母親111名(調査用紙を160部配布し、有効回答率は69.4%であった)。対象者の年齢層は、29歳以下:13%, 30~34歳:43%, 35~39歳:38%, 40歳以上:6%であった。

**手続き** 質問紙調査を実施した。担任保育者を通じて各家庭に配布/回収した。なお、回答の内容が保育者の目に触れないように、調査用紙をシール付きの封筒と共に渡し、封をしたものを回収した。

**調査内容** 調査用紙は次の4つの内容からなる。

①フェイス項目 母親の年齢を尋ねた。

②男性保育者に対する期待・不安 菊池(2002)の尺度(17項目)を使用した。設問では、「男の先生が担任になった場合にどのようなことを期待していますか。また、どのようなことが不安ですか」と尋ねることで、男性保育者に対する期待・不安であることを明示した。各項目について、そう思わない(1点)~とてもそう思う(5点)の5件法で得点化した。

③男性保育者に相談してもよいと思う内容 笠原(1999b)が作成した保育者に相談しても良いと考える相談内容の尺度(15項目)を使用した。その際に、「どのような悩みだったら男の先生に相談してもよいと思いますか」という設問によって、男性保育者への相談であることを明示した。各項目は相談したくない(1点)~とても相談したい(5点)の5件法で得点化した。

④相談したい男性保育者像 笠原(1999b)による、相談に行きたい保育者の特徴の尺度(15項目)を使用した。その際に、「どんな男の先生だったら相談してみたいと思いますか」という設問によって、男性保育者への相談であることを明示した。各項目について、相談したくない(1点)~とても相談したい(5点)の5件法で得点化した。

**調査時期** 2006年12月中旬~2007年1月上旬。

## 結 果

### 1. 相談してもよいと思う内容の傾向

Table 1に、相談してもよいと思う内容の単純集計結果を示す。Table 1からわかるように、ほとんどの項目でどちらともいえないという回答が最も多かった。しかし「相談したい」と「とても相談したい」を合わせると、項目2・3・4では相談したいと考える母親が多かった。

### 2. 各尺度の因子分析

男性保育者に対する期待・不安、男性保育者に相談してもよいと思う内容、相談したい男性保育者像の3つの尺度について、それぞれ因子分析を行った。因子分析は全て次の手順で実施した。①最尤法で因子抽出を行い、固有値の減衰状況から因子数を決定した。②指定した因子数で因子抽出を行い、負荷量が.35未満だった項目や複数の因子に高い負荷量を示した項目を削除し、単純構造化した。③因子抽出後に varimax 回転を行い、負荷した項目を参照して因子を命名した。

(1) 男性保育者に対する期待・不安

3因子が得られ、累積寄与率は55.34%であった。適合度は $\chi^2(42)=81.56(p<.001)$ であった。因子分析の結

Table 1 相談してもよいと思う内容

	相談したくない	あまり相談したくない	どちらともいえない	相談したい	とても相談したい
1. 子どもの集中力が続かない、気が散りやすいと感じるとき	0	4	58	48	1
2. 子どもが内気、消極的で友達が少ないと感じるとき	1	4	41	59	6
3. 子どもが園に行きたがらない、家の中でしか遊べないと感じるとき	1	2	43	62	3
4. 子どもの自己主張が強く、わがままで、自分勝手な面があると感じるとき	0	4	48	51	8
5. 子どもの夜寝る時間が遅い、夜更かしであると感じるとき	2	9	66	33	1
6. 子どもに偏食がある、食が細い、遊び食べをすると感じる時	1	16	65	28	1
7. 子どもとゆっくり過ごす時間が取れないとき	0	16	69	24	2
8. 子どものことで後悔したり、自分を責めたりするとき	3	20	63	24	1
9. 家族が協力してくれない、大変さをわかってくれないとき	5	27	60	15	4
10. 子どもと相性が合わない、子どもを好きになれないと感じたとき	3	23	62	22	0
11. つらさや大変さを誰に相談していいかわからないとき	5	30	62	14	0
12. 子どもが病気がちである、虚弱であると感じるとき	0	15	52	43	1
13. 発育が他の子どもよりも遅れていると感じるとき	1	16	51	42	1
14. 言葉が他の子どもよりも遅れていると感じるとき	1	15	50	42	3
15. 子どもにしゃぶり癖があると感じる時	3	20	65	22	1

果を Table 2 に示す。

第1因子は、子どもはいきいきする、子どもはストレスを発散できるなどの項目が高く負荷したことから、活発な男性保育者への期待と命名した。第2因子は、ままごとやお店屋さんごっこについていけない、運動遊びに偏りがちだといった項目が負荷したことから、男性保育者の遊びへの不安と命名した。第3因子は、細かい指導ができない・子どもの変化に気づくか・女の子の気持ちが理解できないという3項目が負荷したことから、細か

い配慮の欠如への不安と命名した。

(2) 相談してもよいと思う内容

3因子が得られ、累積寄与率は66.31%であった。適合度は $\chi^2(33)=83.93(p<.001)$ であった。因子分析の結果を Table 3 に示す。

第1因子は、つらさや大変さを相談できない・家族が協力してくれないなどの項目が負荷したため、育児負担感と命名した。第2因子は、発育や言葉の遅れ・病気・食事の問題などの項目が負荷したため、発達・健康に関

Table 2 男性保育者への期待と不安

項目の内容	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
<b>第1因子 活発な男性保育者への期待 (<math>\alpha=.841</math>)</b>				
2. 男の先生がいると子どもはいきいきする	.793	-.263	-.120	.712
3. 男の先生がいると子どもはストレスを発散できる	.782	-.091	-.085	.627
1. 男の先生の活動を子どもは楽しみにしている	.774	-.134	-.168	.645
4. 男の先生は追いかけっこが得意である	.645	-.018	.001	.416
6. 男の先生は女性保育者の知らない遊びを知っている	.613	.185	.057	.413
5. 男の先生は戦いごっこが得意である	.524	.218	.162	.348
<b>第2因子 男性保育者の遊びへの不安 (<math>\alpha=.822</math>)</b>				
16. 男の先生はままごと遊びについていけるかどうか不安だ	.033	.894	.263	.870
17. 男の先生はお店屋さんごっこについていけるかどうか不安だ	-.077	.889	.189	.832
14. 男の先生の乱暴な言葉を子どもが真似るのは不安である	-.127	.540	.200	.348
15. 男の先生のクラスは遊びが運動遊びに偏りがちだ	.123	.517	.262	.351
<b>第3因子 細かい配慮の欠如への不安 (<math>\alpha=.750</math>)</b>				
11. 男の先生は子どもの細かい指導ができない	-.002	.262	.781	.679
10. 男の先生だと子どものちょっとした変化に気づくかどうか不安だ	-.171	.199	.694	.551
13. 男の先生は女の子の気持ちを理解しにくい	.066	.296	.556	.402
因子寄与	2.98	2.52	1.70	-
寄与率(%)	22.89	19.41	13.04	55.34

Table 3 男性保育者に相談してもよい内容

項目の内容	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
<b>第1因子 育児負担感 (<math>\alpha=.831</math>)</b>				
11. つらさや大変さを誰に相談していいかわからないとき	.860	.248	.051	.803
9. 家族が協力してくれない、大変さをわかってくれないとき	.855	.107	.096	.751
10. 子どもと相性があわない、子どもを好きになれないと感じたとき	.739	.261	.128	.630
8. 子どものことで後悔したり、自分を責めたりするとき	.635	.287	.234	.540
<b>第2因子 発達・健康に関する不安 (<math>\alpha=.890</math>)</b>				
13. 発育が他の子どもよりも遅れていると感じるとき	.176	.940	.173	.945
14. 言葉が他の子どもよりも遅れていると感じるとき	.238	.861	.260	.867
12. 子どもが病気がちである、虚弱であると感じるとき	.285	.641	.166	.520
6. 子どもに偏食がある、食が細い、遊び食べをすると感じる時	.279	.545	.285	.456
<b>第3因子 性格や行動に関する不安 (<math>\alpha=.855</math>)</b>				
2. 子どもが内気、消極的で友達が少ないと感じるとき	.066	.143	.879	.798
3. 子どもが園に行きたがらない、家の中でしか遊べないと感じるとき	.087	.107	.792	.646
4. 子どもの自己主張が強く、わがままで、自分勝手な面があると感じるとき	.180	.261	.697	.587
1. 子どもの集中力が続かない、気が散りやすいと感じるとき	.117	.214	.596	.415
因子寄与	2.72	2.70	2.53	-
寄与率(%)	22.69	22.53	21.09	66.31

する不安と命名した。第3因子は、内気・わがまま・集中力がないなどの項目が負荷したため、性格や行動に関する不安と命名した。

### (3) 相談したい男性保育者像

2因子が得られ、累積寄与率は52.13%であった。適合度は $\chi^2(19)=42.95(p<.01)$ であった。因子分析の結果をTable 4に示す。

第1因子は、気軽に話ができる・子どもに優しく接してくれる・他の家族や子どもと交流の場を作ってくれるなどの項目が負荷したため、話しやすさ・保育者からの積極的な働きかけと命名した。第2因子は、保育や育児の経験・専門知識という3項目が負荷したため、子どもに関する専門性と命名した。

### 3. 育児相談の規定要因

母親がそれぞれの悩みを相談する際にどのような要因が影響を及ぼしているのかを検討するため、相談してもよいと思う内容の3つの因子得点を目的変数とし、男性保育者に対する期待・不安と相談したい男性保育者像の因子得点を説明変数とする重回帰分析を実施した。変数減少法による重回帰分析の結果をTable 5に示す。

育児負担感については、2つの有意な回帰係数が得られ、1つの回帰係数が有意傾向となった。男性保育者に対して細かい配慮の欠如への不安を感じる母親ほど、育

児負担感についての相談を抑制していた。話しやすさ・保育者からの積極的な働きかけと子どもに関する専門性は共に育児負担感についての相談を促進していた。3つの変数全体の影響力は $F(3,104)=4.79(p<.01)$ で、 $R=.348$ 、 $R^2=.121$ であった。

発達・健康に関する不安については、男性保育者の遊びへの不安を感じる母親ほど、相談しない傾向が見られた。この変数の影響力は $F(1,106)=10.62(p<.01)$ 、 $R=.302$ 、 $R^2=.091$ であった。

性格や行動に関する不安については2つの回帰係数が有意となった。活発な男性保育者への期待と話しやすさ・保育者からの積極的な働きかけは共に母親の相談を促進する傾向にあった。2つの変数による影響力は、 $F(2, 105)=9.28(p<.001)$ 、 $R=.388$ 、 $R^2=.150$ であった。

## 考 察

本研究では、男性保育者がいない幼稚園の保護者を対象に、男性保育者に対する期待・不安、相談してもよいと思う内容、相談したい男性保育者像を調査した。以下では、相談してもよいと思う内容の傾向と、相談したい気持ちを規定する要因を検討する。

Table 4 相談したい男性保育者像

項目の内容	第1因子	第2因子	共通性
<b>第1因子 話しやすさ・保育者からの積極的な働きかけ (<math>\alpha=.840</math>)</b>			
2. 日頃から、気軽に話ができる場や時間を作ってくれる	.847	.191	.754
3. 一緒にいたり、話したりすることが楽しい	.724	.260	.593
1. 子どもに優しく接してくれる	.713	-.021	.509
4. 明るく気さくである	.664	.234	.495
8. 他の家族や子どもとの交流の場を作ってくれる	.539	.302	.382
5. 手紙や連絡ノートなどで、日頃から子どもの様子を教えてくれる	.497	.169	.275
<b>第2因子 子どもに関する専門性 (<math>\alpha=.771</math>)</b>			
13. 保育の経験を豊富に持っている	.196	.894	.837
15. その先生が自分自身で実際に子育てを体験している	.102	.628	.406
14. 育児や子どもの発達に関する専門知識を豊富に持っている	.228	.625	.442
因子寄与	2.83	1.86	
寄与率(%)	31.43	20.70	52.13

Table 5 相談してもよい内容を目的変数とした重回帰分析

目的変数：第1因子 (育児負担感)	$\beta$	t
細かい配慮の欠如への不安	-.192	-2.077*
話しやすさ・保育者からの積極的な働きかけ	.208	2.246*
子どもに関する専門性	.161	1.748 <sup>+</sup>
目的変数：第2因子 (発達・健康に関する不安)	$\beta$	t
男性保育者の遊びへの不安	-.302	-3.259**
目的変数：第3因子 (性格や行動に関する不安)	$\beta$	t
活発な男性保育者への期待	.254	2.803*
話しやすさ・保育者からの積極的な働きかけ	.262	2.884**

<sup>+</sup>p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01



## 1. 相談してもよいと思う内容

男性保育者に相談してもよいと思う内容を集計したところ、ほとんどの項目でどちらとも言えないという回答が最も多かった。しかし子どもの性格や行動面についての悩みについては、相談したい・とても相談したいの合計が過半数となった。これは、男性であろうとなかろうと、保育者という存在が子どもの発達や心理に関する専門家であるという認識されているためだと思われる。したがって保育者には、発達や子どもの心理、行動形成に関する専門知識や指導技法を常に向上させていくことが期待される。

これらの項目に比べて、あまり相談したくないという回答が多かったのは育児負担感に関する項目であった。特に、項目11（つらさや大変さを誰に相談してよいかわからないとき）については、相談したくない・あまり相談したくないという回答が35名（31.5%）となった。育児のつらさを誰にもわかってもらえないという感情は、男性には話しにくいものと思われる。しかし今後、保育現場に男性保育者が徐々に増えていくと思われるので、母親が気軽に相談しやすい雰囲気を作っていく必要がある。ただ、現状ではまだまだ男性保育者に相談しにくいと感じる母親も多いので、ベテランの女性保育者が母親の相談に対応できるような体制も必要であろう。

## 2. 相談したい気持の規定要因

男性保育者に相談してもよいと思う内容が、どのような男性保育者イメージによって規定されているのかを因子分析と重回帰分析によって検討した。その結果、単純集計では相談したくないと感じる母親がやや多かった育児負担感についても、相談したい気持ちを促進する要因と抑制する要因が明らかになった。

相談を促進する要因は、話しやすさ・保育者からの積極的な働きかけと、子どもに関する専門性であった。相談を抑制する要因は、細かい配慮の欠如への不安であった。気軽に話しやすい雰囲気を持っており、保育者側からコミュニケーションをとれることと、子どもについての専門家として期待されるほど、母親は育児負担感を打ち明けようとする。そこで、クラス便りなどで子どものことについて積極的に発信していくことが望まれる。男性保育者のこうした積極的な情報発信が、細かい配慮が欠如しているのではないかという母親の不安を和らげることにもつながるであろう。園内で、母親と離れている間に子どもがどのような生活をしているのか、丁寧に家庭に伝えていくことが、相談によって育児負担感を軽減するために大切である。

次に発達や健康についての不安の規定要因について考える。この因子については、男性保育者の遊びについての不安が、相談したい気持ちを抑制していた。遊びについての不安を抱く母親がなぜ発達・健康への不安を相談しないのかを直接的に説明するのは困難である。本研究では子どもの性別を尋ねていないので、あくまで推測の

域を出ないが、男性保育者が子ども（特に女兒）との関係が構築できないのではないかという不安が、女兒の母親が保育者への信頼感を形成できない理由となっているのかも知れない。今後の検討課題といえよう。

性格や行動に対する不安については、活発な男性保育者に期待する母親は、相談したいと考えている。また話しかけやすい雰囲気を持っており、自分から積極的に関わってくれる男性保育者にも、相談したいと考えている。子どもの性格や行動に関する問題は、単純集計の結果を見ても、多くの母親が保育者に相談したいと考えている。保育者は子どもの専門家であると期待されているので、たとえ男性であっても活発で気さくな人であれば相談したいと考えるのであろう。

## 3. まとめ—保育者養成への提言—

本研究では、男性保育者と接したことがない母親を対象に調査を行った。その結果、子どもについての専門性が高い男性保育者であれば、母親の育児相談の相手になれることがわかった。さらに男性保育者から積極的にコミュニケーションをとってくれる人であれば、相談相手になれることが示された。

しかしこれまでの保育者養成においては、学生のうちに保護者とコミュニケーションをとる機会はほとんどない。教育実習や保育実習の期間中に教育相談や育児相談を担当することはまずあり得ない。そこでこれからは、保育者養成の課程の中で、保護者（特に母親）とコミュニケーションをとる機会を設け、男性保育者の相談者としての力量形成を行っていく必要がある。それも、子どものちょっとした変化に気づき、子どもが成長していく様子を保護者と語り合えるような機会が望ましい。

そこで、養成段階において次のような試みが有効ではないだろうか。たとえば幼稚園・保育所が行う育児サークルに継続的に参加したり、保護者が参加する園行事にボランティアとして参加することなどである。できれば、保護者同士が対話している場に男子学生も参加し、日頃から母親とのコミュニケーションを多く経験しておく方が望ましい。本研究では、第二著者自身が男性保育者を目指しており、予備調査を行った育児サークルに継続的に参加していた。こうした取り組みが、今後の保育者養成では必須になってくるとと思われる。

田中・難波（1999）が指摘するように、今日では育児不安を抱える保護者が多い。男女を問わず保育者養成の段階から保護者とのコミュニケーション能力を育成する試みが必要であろう。その中で、男性保育者に期待されている側面もある。したがって、男性保育者を目指す学生に、保護者（母親）と積極的にコミュニケーションをとる機会を設けることが、現場に出てから保護者の育児不安を解消するために有効であると思われる。

## 引用文献

- 笠原正洋 1999a 育児相談に於いて保護者がとらえる保育者の対応について 中村学園研究紀要, **31**, 21-27.
- 笠原正洋 1999b 保育者による育児相談への保護者の意識 保育学研究, **37** (2), 63-71.
- 菊池政隆 2002 男性保育者に対する態度 保育学研究, **40** (2), 205-211.
- 大村朋江 2006 育児期の母親の生活への満足度および不満に影響を及ぼす要因について—ソーシャルサポートの有効性— 平成17年度富山大学教育学部特別研究論文.
- 田中宏二・難波茂美 1999 サポートと対人葛藤が育児期の母親のストレス反応に及ぼす影響—出産直後と3ヶ月後の追跡調査— 健康心理学研究, **12**, 37-47.

## 付 記

本研究は、平成18年度に第二著者（竹田）が富山大学教育学部に提出した特別研究論文をもとに、第一著者（小林）が再分析・改稿を行ったものである。

本研究における統計処理は、全て SPSS 15.0J for Windows を用いて行った。

(2007年8月31日受付)

(2007年10月23日受理)